

本市学力課題への体系的教育施策の取組みについて（概要）
（学ぶ力・生きる力を育む教育の実践に向けて）

1 考え方

- (1) 施策の焦点は「主体的に学習に取り組む態度」を養うこと。これが備われば、「知識・技能」、「活用力」はあとからついて来る。
 - ・議論すべき焦点は点数ではなく、点数向上につながる学習意欲・態度である。
- (2) 重要な指標は、学校以外の学習時間と自己肯定感のポイントである。
 - ・学校以外の学習時間を全国平均に持っていくことが適切。（土日も含め）
 - ・学習意欲が湧く自己肯定感（承認欲求を満たす）を高めることが適切
- (3) 低学年からの重点的対応
 - ・小学1年生から学習意欲と日々の学習習慣を養うことが大切である。
 - ・早期に学力格差の芽を摘み、成績下位層の底上げにもつながる。
 - ・就学前教育との一貫性
- (4) 成績上位層にも効果がある。
 - ・成績下位層の底上げにより、学級でのさらなる切磋琢磨が可能となる。
 - ・自己肯定感の向上は全ての子ども達の学習意欲を高めることができる。

2 具体的施策

- (1) 授業以外での学習環境の充実・日々の学習環境の提供
 - ・放課後宿題広場、公民館での空室活用、学童保育、図書館、児童センター、民間等との連携（家で1人黙々と勉強できる子は少ない状況を踏まえ、子ども達の居場所づくりを行う。）
 - ・わくわく広場などの各種施策を統合・退職教師・高齢者との連携（子ども見る指導員等を確保する為、優先施策に集中、2時間以上の確保）
- (2) 読書習慣を付けさせることへの取組み
 - ・根拠に基づく読書時間及び勉強時間の最適な時間の目標設定化（例：小学生は読書1時間＋勉強1時間、中学生は読書1時間未満＋勉強2時間以上）

（「本の読み方」で学力は決まる 川島隆太監修、松崎泰・榎浩平著 青春出版社 2018. 9. 15 参照）
- (3) キャリアパスポートにおける適切な目標管理による学習意欲向上への取組み
 - ・学びたいと思う動機付け（やる気スイッチ）を行う。
 - ・1年生は夢を大きく、段階的に現実に合わせていけばよく、その経過が力となる。
 - ・進路指導ではなく、生き方教育として活用（出口戦略ではなく、入口という認識）
- (4) 自己肯定感を養う取組み

学校での自己肯定感を養う取組みを推進し、学習意欲向上につなげる。
- (5) 小学1年生への適切な対応
 - ・教職員等の増員等の重点配置
 - ・児童一人一人に学習意欲（自己肯定感）を持たせ、学習習慣を養うよう丁寧に対応（なお丁寧な対応を履き違えて、児童の赤ちゃん返りとならぬ事が大切）
 - ・幼児教育・修学前教育との連携（小学1年生から既に差が出来ていることの対応）

【想いを言葉に、言葉を形に、形から実践へ。】

- (6) 保護者（地域）との情報共有と協力を得る取組み
 - ・学習意欲向上と家庭学習の時間確保の重要性を保護者に知ってもらい協力を得る。
- (7) 学校力の強化
 - ・校長のマネジメント力の強化と教育委員会によるサポート（過度な負担を軽減）
 - ・実践的な校長研修
 - ・教員への適切な研修と自己肯定感向上の取り組み認識の共有など
- (8) その他
 - ・義務教育学校（小学校と中学校を統合した9年生の学校）の設立
 - ・教育施設の向上の為に体育館のエアコン設置 など

[想いを言葉に、言葉を形に、形から実践へ。]